

The background features a detailed pencil sketch of a hand holding a scroll, with another hand holding a pencil. The scroll is partially unrolled, and the pencil is positioned as if about to draw on it. The overall style is artistic and technical.

Nara National College of Technology

Modern Visual Culture
Creators Circle

2014^{Autum}

なげなよし
の方ね

目次

目次 1

まえがき 2

文章作品 3

釣りへ行ったー 古月爪有 4

洋灯屋の小噺 箱庭氏 10

人形少女の追憶と 小刀 15

異次元世界の酒場より ツリウム 22

アリと キリギリス 25

ビビリの話 デピテヤ 28

贖罪のコントラクト 守畑 岳仁 33

イラスト作品 43

KAIWAI 44

A日 45

箱庭氏 46

wolf 47

クロム 48

コラム 49

音楽班コンピ2014 楽曲制作コメント 50

一年生ゲーム企画 52

あとがき 53

まえがき

えじそん

現代視覚文化研究会平成二十六年年度秋期
会誌「なけなしのかね」をお手に取っていた
だけ、ありがとうございます！今回まえがき
を担当しております、現視研代表のえじそん
と申します。どうぞよろしく申し上げます。

現代視覚文化研究会とは、簡単に言えば文
章、ゲーム、音楽、イラストなどの創作活
動をしている部活です。本会誌には、文章や
イラストのほか、ゲームや音楽の製作にあた
ってのコラムなどが掲載されています。自分
の興味のある分野をじっくり読むもよし、全
体を読み通すもよし……。自由に楽しんで
いただくと嬉しいです！

さて、現視研の簡単な紹介も終わり、会誌
の紹介も終わり、それでは会誌をお楽しみく

ださい！ということでもまえがきを縮めても
良いのですが、折角なので例年通りのテンプ
レートではなく今年度だからこそできる話
をしましょう。そう思って考えているので
が制作秘話などを話そうとすると締切り
ギリまで追われるどころか締め切りに間に
合わない自分の話しかできないのでこれ
は結局例年通りです。やめましょう。

現在私は部室のパソコンでこのまえがき
の原稿を書いているのですが、このパソコン
はスペースキーを押すと問答無用で半角し
か出さない設定になっています。プログラム
などを記述するときはこの設定だと全角ス
ペースの悲劇(注一)に襲われる心配がなく
なるためそう設定されているのだと思いま
すが、このように文章を書いていると少し面
倒だなあと感じてしまいます。段落を下げる

とき全角スペース一つではなく半角スペー
ス二つになってしまいますから。このことに
嘆いている時、隣にいる後輩があることを教
えてくれました。シフトキーと矢印キーで半
角スペースを選択して変換すれば全角スペ
ースにすることができるよう！これは世紀の大
発見です。ちなみにスペースだけでなく、既
存の文字列を選択して変換すれば再変換す
ることができるそうです。ご存知の方もいら
っしゃるかもしれませんが私にとっては大
きな成長となりました。私と同様知らなかつ
た方は是非試してみてください！

皆さんに豆知識を提供したところで、この
まえがきを終わりたいと思います。では、現
視研秋期会誌「なけなしのかね」をお楽しみ
ください！

(注一)悲劇である。

文章作品



釣りへ行った——

古月爪有

集合は朝の五時だった。立秋を過ぎてから、朝日より早起きになることが増えている。もう少し暖かい服を着てくるとか、薄いカーデイガンでも羽織ってくればよかったかもしれない。海のイメージに正直に服を選んだら、薄ら寒い中袖なしに短パンという服装になっちゃった。寒いのは若さでなんとか耐えるとしても、寒さからくる利尿作用はどうにもならない。近くにきれいなお手洗いがあることを祈った。

彼は既に、改札の入り口で待っていた。大きめの、と言っても登山用ほどではないリュックを背負って、右手にはクーラーボックスがあった。簡単に挨拶をして、ホームに降りた。「寒いんじゃない？」と彼が言った。「そ

うかも。海といえど夏だからなあ」「お昼ごろには暑いくらいになると思うけど、しばらくは寒そうだね」使う？　と言って、彼は自分の着ていた上着を脱ぎかけた。しっかりと作りの、良い上着だとわかった。しかし、随分使い込まれているようでくたびれの度合いも大きかった。

さすがに男の子から服を借りるのは躊躇われたので断った。「お腹壊さないように気をつけてね。いつでも貸すから、寒くなったら言って」と彼は言った。純粋な気遣いを、性別を気にして無駄にしまったことが恥ずかしかった。

電車に揺られていたのは二十分ほどだった。電車はがらがらだった。車両はほとんど貸し切りの状態だったが、彼との会話は二言

三言でいどだった。「何を釣るの？」「キス」「……キス？」「そういう魚がいるんだ」「……へえ」

降りたのはそこそこ大きな駅だったが、他に人はいなかった。自動改札を抜けても、街はまだ眠っていた。微かに潮の香りがした。「海、近いね」「うん。少し歩けば、すぐに見えると思うよ」そう言って彼は歩き出した。後ろを歩いた。

ものの数分で海が見えた。空と区別がつかないくらいだったが、沖の方に消波ブロックが見えた。風が少し強かった。会話はなかった。言葉を介さなくても、相手が不機嫌だから喋らないのではないということは分かったし、何か、自然ではない音が、静かな街を壊してしまいそうでこわかった。

更に少し歩くと、砂浜が近づいていた。潮の香りと一緒に、波の寄せる音が耳に届いた。

砂の上を歩いた。スニーカーが砂を踏みしめた。さらさらの砂に足を取られそうになったが、彼の手前、どうにかバランスを取った。足音が不規則になつてしまつたが、波の音のお陰で、彼に悟られることはなかつた。波の打ち寄せるぎりぎりのところまで来た。湿つた砂の上に、ごみが散らばっている。

「あんまり気持ちいいものじゃないけど、この景色にも、慣れてしまふよ」彼は少し悲しそうに見えた。

彼はクーラーボックスを置いて、中からサンドイッチを取り出した。「食べる？」首を振つた。朝食は家で軽く食べてきた。燃費は

良い方だから、しばらくは食べなくてよいだろう。

彼はサンドイッチをあつという間に食べ終えた。勢い良く食べているとか大口で食べているとか、そういうことはなかつたけれど、気がついたら彼は手を合わせて「ごちそうさまでした」と言っていた。

それからリュックを開けて、長細い袋を取り出した。竹刀袋を思い出したが、それよりはるかに短かつた。

中からは、竿が出てきた。彼が軽く振ると、竿が伸びた。彼はもう一本、同じ袋を取り出した。受け取つて、竿を振つた。竿が伸びた。

それから、縮んでしまわないよう、しっかりと固定して、一度差を砂の上においた。彼に倣つて、竿を置いた。リュックの中から、彼はリール二つ、取り出した。釣りの経験は全

く無いけれど、リール位なら知っている。だが、竿にどうやって取り付けるのかがわからなかつた。竿にも、「ここにリールを」と主張している部分があつて、取り付けられそうなものだったが、はまりそうになかつた。彼を見ていると、実に滑らかに、竿をくるくると回して、リールをつけていた。見様見真似

で、なんとかリールを取り付けたが、彼には「そうじゃない」と言われた。見ると、リールが逆さまについていた。笑つてごまかし、付け直した。

竿の先には、おもりやら針やらゴカイやらを取り付けた。ゴカイという生き物は初めて見たが、ミミズに似たからだのくせに、ミミズよりももっと気持ちが悪かつた。ぬめぬめしているし、うごめくしで、なかなか針に通

すことができなかつた。見かねた彼が、「こ
うするんだよ」と一匹分は実演してくれたが、
その後もしばらく戦う羽目になった。

竿を振って、おもりを飛ばす。ダイナミツ
クにやらないと、あんまり飛んでくれない。
ぼちゃん、と無様に落ちるおもりに対して、
彼のおもりは、しゆるしゆるしゆるるときれい
な放物線を描いて飛んだ。それから彼はリー
ルをくるくるくると巻いた。緩んでいた糸が、
ぴんと張った。それから彼は、くいくいと竿
を引いた。張った糸が、海底のおもりとゴカ
イを引きずっているのだろう。また糸が緩ん
だ。その分、彼はリールを巻いた。

何度かそれを繰り返すと、おもりが随分近
くまで来た。これではもう魚は釣れないだろ
うと、リールをくるくる巻いた。やがて白い
波と一緒におもりが見えた。ゴカイは一匹減
っていた。うまく針にさせなかつた分がちぎ
れてしまったのだろう。「竿を置いて、もう
一回餌をつける。竿を置くときはハンドルを
下にする」と彼は言った。

おとしてしまう。やっと針に通した時には、
ゴカイはもう満身創痍の状態だった。

その間に、彼はキスを二匹釣り上げた。「か
かつたよ」と言われて竿を見ると、竿が大き
くしなっていた。やる？ と聞かれたけれど
首を振った。自分で釣りあげたい、という思
いが高まつた。キスは二匹とも大きくて、二
十センチほどもあった。餌を勢い良く吸い込
むらしく、奥のほうまで針が刺さっていた。
彼はキスを押さえると、先の曲がったペンチ
で器用に針を抜いた。キスはまだ元気で、大
きく震えた。リュックの中から、彼は折りた
たみ式のバケツのようなものを取り出した。
そこに海水を組んできて、キスを入れた。キ
スは勢い良く泳ごうとして、バケツの壁にぶ
つかっていた。

彼の視線を受けて、私も少し竿を引く。竿
はなかなか重くて、曲がって抵抗してくる。
しつかりとおもりを引きずってから、リール
の手応えが重くなるまで巻いた。

ゴカイを二匹つまみ上げて二つにちぎった。
ゴカイは身をよじった。体液か血が出て指に
ついた。顔をしかめた。

やっぱりゴカイはうねうねと動いて針か
ら逃れる。刺さりかけたと思ったのに、とり

こちらの仕掛けには、何もかからない。気を落とさず、もう一度。竿をしならせて、反動を使うように、投げる。さつきよりはうまく飛んだ。でも、彼のようにまくはいかない。それでも、彼が「すごいな」とつぶやいた声が聞こえたのは、嬉しかった。かれもぐつと竿を後ろに回して、勢い良く仕掛けを飛ばした。やつぱりきれいな放物線を描き、しゆるしゆると飛んでいった。すごい。綺麗だ。思わず口をついて出た。彼に聞こえていないとよいけれど。

また、少し引いては、巻いて。引いては、巻いて。気分はチョウチンアンコウだった。こちらの気配をさとらせず、餌をひらひらと舞わせて誘う。静かに、波の音だけを聞きながら竿を操作すると、自然と気配が消えて、海と一体になれる気がする。

ほら、かかった。すごい引きだ。ぶるぶる、と携帯のバイブ機能みたいに竿が震えた。竿がしなった。どうすればいいのだろう。巻けば良いのだということはわかる。ただ、勢い良く巻いたほうがいいのか、じっと待つのがいいのか。勢い良く巻けば、針が外れてしまっただけけれど、じっと待っていては、針を外されてしまっただけだ。彼はどうしていたっけ。たしか、こう。早くもなく、遅くもなく。ゆるゆるとリールを巻く。ときおり思い出したように、竿がびくびくと震動を伝える。すごい。生きているってことだろう。このびくびくが、キスが生きているあかし、生命のちからなのだと感じた。

私は狩人だった。海の生き物の命を奪い、それを糧として生きる狩人。キスは食べられると聞いているから、美味しく頂いて私の血

肉となつてもらおう。この溢れんばかりのエネルギーに、私のものになつてもらおう。ゆっくりと、でも確かに巻いていたリールの先が見え始めた。おもりの奥に、目を凝らすと銀色の輝きが見える。もう少し巻くと、それは確かにキスの腹だった。しっかりと針が口の中にあつた。彼はこちらを見ていて、拍手をしてくれた。男と言えはいいのかはわからなかったし、笑っておくことにした。

糸をタグって、顔の近くにまでキスを持つてくる。テレビの向こう側で釣りをする芸能人たちは、こうして自分の釣果を誇っていた。私も、それに劣らない大物を釣り上げた気分だ。キスはまだ元気であやうく頬を叩かれそうになった。ちよつと怖い。針を外すのが難関だった。キスはやはり餌を丸呑みにして、針が奥の方に引っか

ってしまっている。そのうえ、元氣よく跳ねたりするものだから、押さえていることも難しい。困惑して、彼に助けを求めるほかなかった。彼が片手で包み込むと、キスはおとなしくなった。魔法のようだった。それから、

彼は先の曲がったペンチを取ると、私に手渡

してきた。やれということだろう。ちよつと、

いや、かなり緊張する。恐る恐るキスの口元にペンチの先を近づける。なんだろう、すごい陵辱を行っているように感じた。釣り上げて

て食べてしまう相手なのに。「もつと思いつて。ゆつくりやって失敗したほうがキスは

痛い」彼が言った。大きく深呼吸をした。息を吸って、吐いて、吸って。息を止めた。ペ

ンチで針を挟む。針の形に合わせて、弧を描くように引っ張った。ぐぐつと抵抗があったけれど、思い切り抜いた。思っていたよりも

あっさりとは抜けた。キスは一度も暴れなかった。彼に手渡されたそのキスを、私は既に二匹の先輩が待つバケツにつっこんでやった。また三匹は勢い良く泳いでたがいにぶつかりあっていた。

それから私はまた四匹釣ったし、一度など

は二匹が同時にかかった。片方の針を外そうとしている間にもう片方が邪魔をして、大変

だった。最後の二匹の針は、自分一人で外した。彼は、五匹追加で釣った。合計で七匹になる。こんなに釣れた経験は今までなかった

らしい。私のおかげだと言っていたが、さすがに根拠が無いことがわかった。

キスをクーラーボックスに入れて、サンドイッチを食べた。彼が作ったというサンドイッチは、驚くほどに美味しかった。ハムとか

卵とか、別に特別なものを使っているわけではないのに、私が作った時とくらべても雲泥の差だった。まさか料理で男の子に負けるとは思ってなかったから、結構凹んだ。でも現金なもので、お腹が膨れるとそんなことも忘れてしまっていた。

帰りの電車のなかには、いくらか人が乗っ

ていた。それでも、やっぱり人は少なかった。私があくびをすると「起こすから寝ていいよ」と言われた。まるで今日の彼は私の保護

者ようだった。お言葉に甘えて眠らせてもらった。

駅で別れるときに気がついた。私はキスの料理方法を知らない。母は、どうせやる気が

無いだろう。となると、どうやって食べればいいのか。去りかけた彼を引き止めて、尋ねた。「それなら、僕の家に来るといいよ。

今日の午後はキスを調理するつもりだったから。教えるよ」と彼は言った。

洋灯屋の小噺

箱庭氏

その店は私の住居の裏路地を真っ直ぐ、日が暮れると仄暗い道を歩いた突き当たり、目が眩むかと思われるほど明るい夕日を留めたままのように佇んでいる。実際輝いているのは数多の洋灯で、ここの店主はそれらを売って生計を立てていることになる。洋灯屋とは呼ばれるものの、売り物はそれだけではない。古く何に使われていた物が最早わからないような物から、見たこともないような新しい物まで、大抵の物はここに来れば見つかるだろうと思われるほど多くの商品が置かれている。私とその新居に越して来て、この店を見つけてからというもの、品を見に、店主の話の聞きに、入り浸っているのである。

何度来ても飽きない。時に、売れて無くな

っている物もあれば、買い取ったらしいものが並んでいたりと常に違う品が所狭しと並んでいる。鏡に本、眼鏡、水差し、楽譜らし

きものに……標本？ 誰がなぜ売ったのか

考えるのも良いし、ただ眺めているだけでも面白い。無論手にとって様々な角度から見

るのも良いものだ。私は偶々手元にあった茶けた表紙の冊子を取る。開くと流れるような紺

の手書き文字が並んでいた。

「これは？」

いつの間にか背後に立っていた店主に冊子の中身が見えやすいようにしながら尋ね

る。洋灯屋は私の後ろから手を回してゆっくりと開かれた頁を撫でた。

「ああ、これは前にお客が置いていかれた物

なんですけどね」

「売り物には見えませんが」

「いやあ、変わったお客だね。それと洋灯を換えてくれと」

一度それを閉じて無地の表紙をなぞる。古びた紙の、使い込まれたざらりとした感触が指を伝った。引つ繰り返して背表紙から開

てみたが、そこにも紺の染みがあった。どう

やら一冊使い切っているようだ。正直なところ、あまり価値のあるようには思えない代物

だった。

「洋灯ひとつの価値があるのか、とでも思っ

てなさるんでしょう？」

店主の噛み殺したような、特有の笑い声が聞こえた。

「まあ、読めばわかるさ」

内容に価値があるものなのか。ふうん。今

度は一頁目から開く。何も装飾の無く、洋灯

屋の小嘶”と、ここも手書きの文字で書いてあった。その頁の裏には、“我が夢と思いで捧ぐ”とある。奇妙なものだ。三頁目から紺の文字が書き連ねられている。ここから本文らしい。

へいつからか、わたしは多分特定の夢を見る

ようになった。否、起きた後の夢見心地な感覚が同じ物だといったほうが正しいだろうか。それはわたしの記憶に基づいているのか。それはわたしの記憶に夢の記憶ではなく、実感した記憶は無い。

眠れなくて、ふらりと外に出る。夜の中、ふらふら歩を進める。まちは静かで、暗い。灯を点けて回る点火夫がいるわけでもない、道を歩み行く。もう満月は過ぎたかと、千切れた雲の漂う天を仰ぐ。ちかりちかり弱く揺れ

る光は、わたしの見る夢とどこか良く似通っている気がする。また、ひどく曖昧に思うのだ。

「つつ」

このまま延々続きそうな静寂を破ったのは足を駆け抜けた衝撃とわたしの唸り声であった。

「こりや失敬」

何か置き放されていた物に当たったかと思っただけで、何しろ誰かがいるし、それ以上に、目も眩むような灯があったからだ。

「あたしやあ洋灯屋でさあ」

誰かと尋ねる前に答えられて面食らう。洋灯屋といった人間はけたけた笑う。売り物の明かりで顔は良く窥えないが、印象の薄い声で笑う。こんな屋台——と言うより店、か——

——があつただろうかと己に問うも、いきなり現れるわけもなし、きつとぼーっとして気づかなかつたのだろうかと結論付ける。

ところでさあ、洋灯屋に話しかけられて我に返る。

「これも何かのご縁ってやつだよなあ。どうだい、ひとつ」

そういつて洋灯屋の骨ばった指が指し示したのは、売り物らしい洋灯だった。わたしはこれと言う意志なく手を伸ばし、手に取ったのは特に装飾も無い簡素な洋灯だった。しかし、揺らめく炎はあの紺に塗られた夜空を切り取ったようで、炎と言ってよいのかかわらないほど、暗い。辺りを照らすことはおろか、その洋灯の形をなぞるだけで精一杯なようだった。なんだこれは。

「お前さんにはどう見える？」

「は」

「だからどう見えるって訊いてるんだ」

「どうって」

洋灯屋にはこの灯が見えないのだろうか。

わからない。なぜ同じものが見えないのだろうか。

「夜のような灯が見えます」

「そうかい、じゃあそうなんだろうなあ」

「どういう事ですか」

「そいつはさ、人の思い出やらを映すらしく

てなあ。——残念ながら、あたしにや何色にも見えない」

そんなことがあるものなのか。わたしは言

われたことの心あたりを必死に探して、洋灯

屋の後半の小さな言葉は聞き取れなかった。

しかし、もし、そうだとしても、夜の思い出？

わたしは幼いころからあまり夜と関係のあ

る生活を送ってきたわけではなかった。両親

はわたしの学業に関することにはあまり口

出ししなかったし、これと言って定められて

いた門限もなかった。ただし、午後九時以降

起きてることだけは、許されなかった。今

でもその癖が残って、その時刻には睡魔に襲

われる。

そんなわたしに夜、とは。

まあ、どこかにそんな憧れはあったのかも

知れない。

「それで、いるのかい？」

洋灯屋の声が響いて思考から引き戻され

る。

「いや、生憎、手持ちがなくてね」

「そうかい、じゃあしょうがねえなあ。ご縁

がなかったてえことで」

気がつくくと大分冷え込んでいる。わたしは

上着の裾を引っ張って、着込みなおした。洋

灯はいつの間にかわたしの手を離れて、洋灯

売りのところへ、他のそれらに埋もれるよう

にひっそりと、置かれていた。

その日はもう帰ってしまったて、後日、おぼ

ろげな記憶を頼りに洋灯屋がいたであろう

場所に行っても、目の奥を突くような灯はど

こにもなかった。

そこで文章は途切れ、最後の頁には大きく、

その洋灯らしい絵が描かれていた。裏表紙に

も、どこにもそれ以上の言葉は見当たらなか

った。

「あなたのことじゃないですよね」

私の声は問いかけとも確認ともつかないものだった。

「違うだろうね、多分」

「多分？」

「いつかかれたか詳しくわからないものでね、多分としか言いようがない」

一体この〈わたし〉とは誰で、〈洋灯屋〉

は何者だったのだろうか。

私が思い当たる洋灯屋はこの店主くらいで、他には聞いたこともない。やはり、この〈洋灯屋〉は店主なのではないか。店主にその記憶がないだけではないのか。例えば、

〈洋灯屋〉の洋灯に辺りを照らす役目などはじめからなくて、持ち主を映すためだけのものではあったとか。〈わたし〉は明るい灯が見えていたのに、実際に取ったのは輝きもしない洋灯であったとか。もしかすると〈洋灯

屋〉は人などではなくて、人の思い出が集まったものであったとか。だから、“何色にも見えない”のではないか。

とつぴな想像が膨らむ。

そういえば、ここを見つけてからの店主を思い起こしていく。この地域はかなり暑くなるのに、いつも長袖であった。肌が弱いのか何かかと思っていた。いつ来ても手袋を外している様子はなかった。この店には貴重な品もあるのだろう、丁寧に扱うためだと思っていた。定休日がなく、勝手に休みにしてはふらふらと出歩いていた。気分屋なのだと思っていた。

すべて違う事実だったのかもしれない。店主が周りにいなさそうなことを確認して、表の洋灯を見やる。雑多に置かれたようなそれらは、しかし、ある程度の均衡をもつ

て息を潜めている。その中に、ひとつ。ことさら静かに置いてあるのは、つい先ほど見た覚えのある――

「どうしなさった？」

店主は私の目の前に佇んでいた。まったく気づかなかった。気づかずに私が手から滑り落とした冊子を店主が何事もなく拾いあげる。

見えてしまった。

手袋が少し捲れあがったその中に、筋張った手など存在せず、あったのは、ただ色のない虚空だった。〉

私が読み終わったことを見届けたらしい店主が、例の噛み殺した笑いを含みつつ、ごく自然に手袋を取った。

「この手袋も、外に出した洋灯も、その作者への敬意なんです」

了

人形操者の追憶と

小刀

ある村の通りで、毎日行われている人形劇。台の後に立つ少女の両手に見える十本の光の筋は、煉けた二人の子供……を模した人形へと繋がっている。少女が右手を動かす度に茶髪の少年が、左手を繰る度に金髪の少女が動き、舞い、踊る。人形が明らかに小さいことを除けば、本物の子供たちの様に四肢を動かし、会話しているようにすら見える。それほどまでに、卓越した技術を少女は持っていた。

しかし、少女の顔は明るくはなかった。通りゆく人々が、誰も少女の人形劇を見てくれないからであろうか。人形にばかり注目していたから気が付かなかったが、よく見ると少女も、道行く人も酷い身なりをしている。ぼ

ろ切れかとすら勘違いしかねない服に身を

まとう瘦せた人々には、見事な人形劇を眺める余裕もないのだろう。少しして少女は、手を止めて人形をしまい始める。台の下に置いていたであろう小さな鞆に人形を収め、少女は何処かへと歩き去った――

「何で誰も見てくれないんだろう……」
私が一人で暮らす、村の隅っこにある小屋。誰に聞いてもらうわけでもなく、ただ咳く。薄暗い部屋に広がった白い息だけが、私の存在を証明していた。

「せっかく頑張ってるのに。ねえダイ、マリナ？」
机の上にちよこんと座っている、私の子供たち二人に声をかける。
「……」

「……」

もちろん返事はない。私の子供とは言っても、その実はただの人形なのだから。けれど一人の寂しさを紛らわせるには、人形相手でも十分だった。

「何で……誰も」

今日は誰も私の劇を見てくれなかった。理由なんて分かり切ってる。けれど、どうしても納得することが出来なかった。

「私だって頑張ってるのに……」
もう、今日は寝てしまおう。明日はきっと誰かが見てくれる。そう信じて、私は机に突っ伏し、目を閉じた。

村一番の人形操者、それが私の評価だった。歳の誕生日に買ってもらった二つのマリオンネット操り人形。暇つぶしにそれを動かす姿を見た

人々が、私をすごく褒めてくれたことは今でも覚えている。

「すごい……本物の人間みたいだ！」

「いいもの見れたよ、これはお小遣いとお礼にあげよう」

「きつと国一番の人形遣いになれるだろうねえ」

私がみんなの前で劇を行うたび、人々は熱狂し、落涙し、感動していた。お金や新しい人形を貰い、それを使ってより素晴らしい劇を行う。それを見た人々がまた感動する。決して豊かではなかったこの村が、一番活気づいていた時期だった。けれど、そんな楽しい日々も長くは続かなかった。

今から一年前、私が一二歳の時。村は大飢饉に見舞われた。食べる物も無くなり、人々が一人、また一人と亡くなっていく姿はこの

世の地獄とすら言い表せた。私達家族は人形劇で稼いでいたお金で食い繋いでいたもの

の、村に訪れた強盗にお金を全て奪われ、その上両親も殺されてしまった。それから他の人々よりもなお苦しい生活を強いられることとなる——当然だ。人形以外の事を何も知らない少女が、一体何を出来るというのか。

初めのうちは、貰った人形を二束三文で売り、劇をして僅かばかりの施しを貰うことでなんとか生計を立てていた。しかし、それも長くは続かない。売れる人形も減り、人々は人形劇などに対価を払う余裕など無くなっ

ていく。人形が残り二つになり、それも売ろうとした時思い出した。今は亡き両親からのプレゼント。いくら生活が苦しくてもそれを売ることはできなかった。私はその人形に、

父と母の名を付けた。二人の事を忘れないために。
そして今は、時折訪れる行商人等にお金を恵んでもらうため、毎日村の通りで劇を繰り返している。たとえそれが、誰にも見てもらえない三文芝居だったとしても——

——チュンチュン。小鳥のさえずりに、閉じていた目を開く。人々が土の上で苦しんでいる、空の中の鳥は優雅に舞い踊るのか。そんなどうでもいい事を考えながら、今日も通りへ向かう準備を始める。朝ご飯なんて、ない。

昨日よりも底冷えする寒さが肌を刺す。
「はあ、はあ……」

震え、かじかむ指先を必死に動かすも、人形は上手く動いてくれない。普段の人形劇すら見てくれる人はいないのに、こんな無様な姿に施しをくれる人なんているはずが……

——プツリ。

「あつ……！」

ダインの右腕とマリナの左腕に繋がっていた糸が、音を立てて切れてしまった。これでは劇を続けるなんて出来ない。未練を残しながらも、人形をしまつて家に帰ることにした。

人間の髪の毛は、重い物でも吊るせるくらいに固い……かつて村に訪れた行商人から、そう教わった記憶がある。ろくに洗うこともできずぼさぼさになった頭から、やや長い髪の毛を二本抜く。刺すような痛みに一瞬まぶ

たを閉じてしまう。目を開いたとき私が見たのは、遠目には銀色の糸と見紛う白い髪の毛だった。……ろくな生活をしなかった自分にふさわしい。一人、そう自嘲気味に笑う。

気を取り直して、まずダインに糸——いや、髪だった。髪の毛を繋ぎ直し始める。しかし、震えが止まらない手にとつては髪と糸を結ぶことはおろか、人形を支えることすらままならない。人形を手に取り直しては落とし、取り直しては落とし……そんな繰り返しの中、私は思ってしまう。

「……あれ、私って」

——なんのために、人形劇なんて始めたんだっけ？

思い出せない。思い出せない。何のために？ どうして？ 誰が？

混乱する思考。そこに空腹が絡まり、頭の中がかき回され、ぐちゃぐちゃになっていく。視界がくらみ、座っていることすら出来ない。苦しい。横になり、落ち着くのを待つ。

……視界が落ち着いてきた。体を起こし、机を見やる。当然そこには、私が修理していたダインがその身を横たえている。普段なら何とも思わないその光景。なのに何故だろう。その姿を見ただけで、私の頭は真っ白になって。

「……っ！」

気が付くと、私はダインの事を思いっきり握りしめていた。

「お前さえ！ お前たちさえいなければ！ 人形なんかくれなかったら！」

そして、罵声。自分が考えるよりも先に、言葉が口から吐き出される。……綺麗な言葉ではない。もっと、汚らわしい何かだ。

「……」

当然、ダインは何も答えない。人形なのだから当たり前、何も感じない。はず、なのに。

その黒いガラス玉が、まるで悲しいとでも訴えているかのようで。

「……ごめん、なさい」

ダインを離し、謝る。そのガラス玉は、泣きじゃくる私を鏡のように映している。

「ごめんなさい、ごめんなさい。……パパア

……ママア……」

泣きじゃくる私を無表情にダインが見つめる。その隣では、マリナが同じく無表情に、

机の上の二本の糸を眺めていた。

気が付くと、窓の外は既に真っ暗になって

いた。泣き疲れて、寝てしまったのだろうか。

少し寝たからか、手の震えは収まっている。

「……糸、付け直そう」

気合を入れるかのようにそう呟き、私は二

人の修理に取り掛かり直した。さっきのことを謝罪するかの様に――

――チュンチュン。小鳥のさえずりに、没

頭していた意識が戻ってくる。二人を見ると、

それぞれ糸が五本ずつに戻っている。修理は

ちゃんと出来たらしい。私は一息つき、通り

へと出かける準備を始めた。

「はあ……っ！」

絶食も三日目、その上実質の徹夜。体は寒

く、指が震え、心臓がやかましく鳴り響き、

視界がくらむ。何故そうまでして苦しむの？

――そんな幻聴まで聞こえてきた。

「……っ！っ！」

それでも私は、人形を動かし続ける。理由

なんて分からない。けど、動かさなかったら

生きていけない。生きるため。ただそれだけ

のために、私は指を動かし続ける。

「もしもし、そこのお嬢ちゃん」

あれ、おかしいな。聞いたことのない人の

幻聴まで聞こえてきた。これはもうまずいか

な。

「おーねーちゃん！」

腕を思いつきつねられる感覚。この声が

幻聴でなかったことを示すもので。

「――いたいっ!？」

目の前が、少しだけはつきりする。まだ震えもくらみも取れないけど、幾分かはましになった。

「こらっ、いきなり失礼じゃないか！」

「だってー、パパがなんかいよんでもおへんじしないからー」

「だってー、じゃない！ とにかく謝りなさい！」

目の前にいるのは、三人。身なりのいい若い男性と女性、それに9歳くらいの小さな女の子。親子なのかな、男性が女の子のお父さんみたいに叱っている。その横では、女性が私に対して苦笑いしている。

「うー……おねーちゃん、ごめんなさい」

女の子が、私に謝る。そこまで気にしてないんだけどね。

「いいよ、気にしないで。それで……私にか御用でしょうか」

女の子に一声かけてから、父親らしき人物に尋ねる。父親は恥ずかしげにこめかみをかきながら、話し始めた。

「娘が失礼しました。実は、娘が人形好きでして。この村にとっても素晴らしい人形遣いがいると聞いて訪れたのです」

「……はい」

父親はそう話しながら、一度娘の方を見た。よく見ると少女は、まるで私にそっくりな人形を愛おしげに持っていた。

「ここでああなたが一生懸命人形を操っているのが見えます、もしかしたら貴方がそうかと……大丈夫ですか、顔色が悪いですが」

初めて会う人に体の心配をされてしまう。とても申し訳ない。

「いえ、大丈夫です……それで」

「ああ、それで、是非娘に人形劇を見せていただきたいと思ひまして」

何日ぶりの依頼だろうか。子供もいるし、頑張らないと。

「分かりました。……人形操者アイの、マリオネットドラマ操り人形による劇。人形は、ダインとマリナの二体でお送りします。どうぞ、よいお時間を……」

観客のいてくれる劇。それも、ただ通り過ぎたから見るのではなく、真剣に見てくれる。どれほ嬉しいことだろうか。体が限界の悲鳴を訴えていても、心は歓喜の悲鳴を上げていく。楽しい。

そんな満足感の中、私は無心で人形を繰り返した。

「……以上で、閉幕と相成ります。皆様、御観覧ありがとうございました」

終了の挨拶と共に、ぺこりとお辞儀をする。

観客の三人から、長らく聞くことがなかった

拍手が響き渡った。

「素晴らしい……！ 王宮の周りにも、これほどの腕前を持つ者はいなかったぞ……！」

「本当ですね。よい物を見ることが出来ました」

父親と母親が、私の劇を絶賛してくれている。けど、私は立っているのもつらい。目の

前はもはや絵の具をかき混ぜたようにしか見えず、頭も割れるような痛みを訴え続ける。

「……おねーちゃん」

父親と母親が話し込む中、女の子が一人、

私の方に駆け寄ってきた。

「どー、したの、かな」

声を発するのも苦痛だ。けど、せつかく来てくれたのだから、返事はしないと。

「えーっと……すごかった！ ありがとう！」

う！

——え？

「わたしも、おねーちゃんみたいな『人形つかい』さんになる！」

——そっか、簡単な事じゃないか。

「だから、おねーちゃんもがんばってね！」

わたしもおうえんしてるから！

——私が人形劇をして望むことなんて。

「おお、頑張りなさい。そういえばアイくん、君にはお礼をしないと……」

——ただ、「お礼を言われること」だけなんだから——

「……………」

——最後に、夢が叶って、よかった。

ドサッ。

「え、おねーちゃん、おねーちゃん！？」

「ア、アイさん！？」

「おい、アイくんしっかりしろ！ おい！

しっかりしろッ！」

……周りが少し騒がしいけど、気にしなくていいか。

「おねーちゃん！」

……おやすみなさい。

今日、ある村の少女の葬儀が行われた。国

王陛下直々の、大規模な国葬。曰く、村一番の人形遣い——いや、「国一番の人形遣い」と呼ばれた人物だった。

素晴らしい才能を持った少女の、あまりにも早すぎる死。参列者は皆、その死を悼んだという。

国王の娘は、少女の使った人形二つと自分の持つ人形と一緒に埋葬することを提案した。もちろん、反対する者は誰もいない。ここに、一人の少女と三体の人形が、同時に埋葬されたのである。

この、国王の娘が後に「国二番の人形遣い」と呼ばれるのは、また別の話。

——ただいま、パパ。ママ。

——お帰りなさい、アイ。

～Fin～

異次元世界の酒場より

ツリウム

「ジョン！ どこにいるの？ ジョン！」

「なんだいハニー」

「場末の酒場で安酒かつくらってる場合じゃないわ」

「おいおい、興奮しすぎて、可愛い顔が壊れたロボットみたいになってるぞ」

「そんなことはどうでもいいのよ！」

「いやちよつと怖い」

「どうでもいいのよ！」

「はい……」

「田舎のギャングが街で暴れているわ、どうにかして、市長でしょあなた！」

「私は副市長だ」

「いいから来て！」

「分かったよ……」

「分かってない！」

「そんな面倒なことを言っている暇があるなら大丈夫だね」

「ここがギャングのいる場所か」

「そうよ、ほら！ あそこにいるわ！」

「おいおい、あれはどう見ても腰の曲がったおばあさんを介抱している好青年じゃないか。失礼なことを言うものではないよ」

「いいえよく見て！ あのおばあさんは株

で一山当てて小金持ちになったおばあさん

よ！」

「ああ、言われてみればそうだな」

「きつと彼らは介抱したおばあさんにお金をせびるに違いないわ！」

「だからあまり失礼な事を言わないでくれ」

「もう我慢できない！ とっちめてくるわ！」

わ！」

「おい待つんだハニー、君が持っているのはメリケンサックではなくて五つのポテコ……行ってしまった」

「あなた達！ おばあさんをだますのを止めなさい！」

めなさい！」

「ちっ！ ばれちやしようがねえ！」

「驚いたよ。本当にギャングだったんだね」

「遅いわジョン、早く奴らのみぞおちを突くのよ！」

「私はそんな格闘技能を保持していないんだよ」

「役立たず！ 仕方ないから私がやるわ」

「そんな特技があるのか、それは初耳だな」

「浮気したあなたを監禁するための準備だつたからよ」

「……私はとんでもない地雷を踏んでしまったようだね」

「一生離さないわジョン」

「私も覚悟を決めるよハニー」

「おい！ イチャイチャするんじゃないわ！」

「まだいたの？ もう帰っていいわよ」

「お前から突っかかって来たんだろ！」

「……あれ、その着古したコートと地味な帽子

は……ジョン！ ジョンじゃないか！」

「……はっ、そのなんか古代ギリシヤっぽい

一枚布の衣装はメロスじゃないか！」

「ひさしぶりだなあ、こんな物騒な彼女まで

連れちまって」

「お前は一体どうしてそんなふうになってしまったんだ。昔は邪知暴虐の王に反抗してたじゃあないか」

「そんなのはもう古いぜ、今流行ってるのは腐った政治に対する平和的なデモだ」

「それはあれだろ、場末の酒屋でいつも、俺が政治を変えてやるとか息巻いている若者がちよつと成長して現実を知ったやつだろ」

「そんなことはないさ、俺達はいつも行動に出てるぜ」

「具体的には？」

「空港で座り込みをしている」

「あれ迷惑なんだよやめてくれ」

「俺達は屈しないぜ！」

「目的と手段がごっちゃになってるね」

「もう、私を放って話を進めないで」

「すまないハニー、君を放っておくつもりはなかったんだ」

「そうよ！ もともと私達はギャングを捕まえに来たの、仲間がいるならそいつらのこ

とも教えなさい！」

「彼らはもうこの街にはいないよ、俺を置いて先に行っちゃまった」

「いいから教えなさい。手配リストに載せておくから」

「おいおい、私はそんな物騒なもの知らないぞ」

「それはあなたに知らせていないからよジョン」

「今日は聞かない方が良かったことがたくさん聞けるな」

「早く言いなさいよ！ アバラ折るわよ！」

「分かった、分かったから、俺を見逃してくれるなら全員の名前を言うよ」

「早くゲロってこの街から出て行きなさい！」

「い！」

「仮にもレディがゲロってなんて言うものではないよ」

「ジョンは黙ってて！」

「はあ……」

「じゃあ今から言うからな。ええと、俺らは四人組なんだ。それで、俺を抜いた三人はシ

イクスピア、ゴツホ、ガリレオという名前

だ」

「こんなところで出したら怒られそうな名前だね」

「ジョン、奴らについてなにか知っているの？」

「少なくとも奴らなんて呼び方をしていい相手ではないねハニー」

「いいから教えなさいよ！」

「腐った水に片足を突っ込むのは私だけでいいんだよ」

「よく分からないけど今日初めてジョンが格好良く見えるわ」

「そう言ってくれると嬉しいよ」

「でもジョンは片足だとすると私は全身よ」

「それは言わないでくれると嬉しかったかな」

「あ！ ジョンが無駄話をしている間にギヤングが逃げちゃったじゃないの！」

「ああ、本当だ。彼は昔から足の早さとスタ

ミナだけがとりえのような奴だったからな。

僕達が追いかけても無駄だろう」

「まあいいわ、実害は出ていないのだし、この街から出て行くのならそれで良しとしましよう」

「おや、君にしてはすいぶん穏やかな発言だね」

「なによ、それじゃ普段の私が乱暴者みたいじゃない」

「そんなつもりで言った訳じゃないよ」

「まあいいわ。それよりジョン、今日やることは終わったのだし、明日の朝まで飲みましようよ」

「いや、明日は朝から仕事がないから行くわよ！」

「はあ、市長になんて謝ろうかな……」

「はあ、市長になんて謝ろうかな……」

了

アリと

キリギリス

ふと目についた雑誌を開いてみると、一片の詩が載っていた。

君死にたまふことなかれ

鬼が島決死隊の中に在る彼を歎きて

赤鬼

た。

あ、桃太郎よ、君を泣く、

君死にたまふことなかれ、

桃より生れし君なれば

親のなさはまさりしも、

親は刃(やいば)をにぎらせて

鬼を殺せとをしへしや、

鬼を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや。

桃太郎は室町時代の人だどこかの漫画

で読んだ気がする。室町の二十四とは大概な年齢だろうに、その年まで家においたお爺さんとお婆さんは十分に優しいだろう。

こんな的外れな詩を書く奴はなんという

名前なんだとにやついていたが、赤鬼という

文字を見た途端に熱が冷めていくのを感じ

た。

こいつ、何かにつけて泣いているな。鬼が

桃太郎を泣くとは、泣けるのなんなんでもい

いのだろうか。

雑誌を放り投げてテレビの電源をつける

と、少し前に話題をさらった因幡の白兔の謝

罪会見が映っていた。

「鮫なんて何匹騙しても、同じや同じや思

うてえ」

怒り心頭の鮫達に皮を剥がれて、情けない

悲鳴を上げる兔。見飽きた映像に、また自分の中の熱量が吸い取られていくようだった。

テレビをそのまま放っておき、スマートフ

オンを弄ってTwitterを起動、タイムラインを辿ってみる。

☆月のプリンセス☆

@nayobanboo

コンビニでバイト中！

おちゃめなアイス箱入り娘だよ☆

さむーい♪

20分前

畜生巡查@号泣

@police_dog

通報しました

20分前

兔@餅つきガチ勢

@moon_rabbit

姫様帰ってくんの？

16分前

大炎上だった。

画面がリツイートで埋まっている。

あの我がまま姫も収まるのは竹の中だけにしておけばいいものを。残暑でおかしくなっているとは思えない。

通報されたようだから、今頃は強制送還を喰らって涼しい月に帰っているだろう。今回の説教は何年続くか楽しみだ。

暗い愉悦で気分が持ちなおしたので、未だクリアしていない難関に挑んでみよう、とゲーム機を引っ張り出したところで来客があった。

「キリギリス君、遊びに来たよ！」

アリだった。今は秋なのだし、食糧の備蓄で急がしいのでは？

「ちよつと有給取ったんだ。自分の家にも暇だし、つい来ちゃったんだよ」

アリ社会に有給休暇とかあったのか。知らなかった。

内心驚きながら、ゲーム機を置いてバイオリンを取りだす。

アリの複眼に期待の色が浮かぶのを横目に、適当に思いついた曲を弾く。

曲調速めのアリが好きなジャンルの曲。初めの方はアリは楽しげに聞き入っていたが、一曲弾き終わるころにはどこか不満げにしていた。

どこかおかしかったか、と聞くと、「この曲、前に聞いたと思うんだけど」

それはそうだろう。二年前の冬にさんざん弾いたもの。

君が毎日弾けって言うから何度も何度もやったとも。今でもそらで弾けるのはそのせいで。

それが顔に出ていたのか、ごまかすように「新しい曲を弾いておくれよ」と言われたが、そう簡単に弾くわけにはいかない。

こちらは何も無い冬の間にはアリ達の娯楽を担い、その対価に食糧を分けてもらうのだ。

あの食糧備蓄を怠けて死にかけた冬に、アリ達との間に生まれた暗黙の了解である。

そんなこちらにとつて音楽その他のレパートリーは生命線。飽きられてクビになってはたまらない。

過ごしやすい秋の時間を好きに使える今の生活を気にしているのだ。

と、そんな寄生虫のような本音は言えないので、下手な薄笑いで茶を濁す。

「…まあいいよ。そうだ。君に話したい面白い話があるんだ。君もきつと笑うと思うよ」

まいったな。話を聞くのは苦手なのに。

昔から飽きっぽい性分で、人の話を聞いていると途中で飽きてしまう。

今回も最初のほうは相槌を打ち、楽しく聞いていた。だが、案の定飽きが来てしまい、自然と上の空になってしまう。

ああ、こうだから友達ができないのだよな。勝手過ぎるだろう自分。

ふと、アリの楽しげに揺れる触角からアリに視線を戻すと、アリは壁の時計を見ていた。

「もうこんな時間か！」

「ごめんよ。ちよつと用があるんだ」

休みの日まで用があるのか。用がないから休みなのではないのか。

密かに衝撃を受けつつアリから聞いたところによると、

「ちよつと仲間とカラオケに行くんだ。

歌う曲もばっちり練習済みなんだぜ」

カラオケ……。

かつての光景が頭によぎる。自分が歌いだすと同時に下がる皆のテンション。冷房のせいでなく肌寒い部屋。

君も一緒にどうだい、なんて言われたが丁重に断っておく。

「そうか、それは残念だよ。

君はもつと外に出ればいいのに。

君って話してみれば楽しい奴だしさ」

余計なお世話だ。

他人は何がきつかけでこちらに危害を加

えてくるか分からない。

一人のほうがずつといい。

「……それじゃあね。この冬も頼むよ」

家を出て行ったアリの窓から眺める。

まるで仕事の時のように忙しそうだった。

アリが出て行ったあとの部屋は、埃が床に

落ちる音まで聞こえそうなほど、静かだった。

いつもの静けさに落ち着くような、よくわからない喪失感に落ち着かないような。

そこまで考えて、自分は一体何を考えているのかと苦笑する。

もともと、ここはこうして静かだったのだ。入ってくるものも、出ていくものも無い。

最初から何も変わらないのだから、喪失感などあるわけがない。

ゲーム機を取ろうとして、代わりにバイオリンを手取る。

特に意味は無い。

これもいつもの気まぐれだ。

今日も今日とて、自分是不変ならない。

何故だか、ゆつくりした曲が弾きたい。

おしまい

ビビリの話

デピテヤ

それに「イイイイ」だし、俺そもそも反対
 したし？これ俺に責任はないだろうし？や
 っぱ君子危

余裕が微塵も感じられない俺ら

「てかさつきから田辺たなべがやけに」

「うっわ来たわよどうすんのよこれ！」

「うきに近寄らずなんだって」

「とにかく振り切るしかねえだろ！」

「田辺ええええ！」

——ほら、パラレルワールドってあんじゃ

俺たち仲良し四人組。調子ブツこいて廃墟

ん？もしもあの時こうしていれば、とかそん

に行きました。

なやつ。あれってマジいいよね。自分が不幸

はい、これ以上の説明要らないよね？もう

な時でも「他の世界じゃ俺は幸せなんだ」み

察してるよね？つーわけで他三人どうなっ

たいに逃げれるじゃん。現実逃避だけどき。

てもいいから俺だけは助けてください。

ホントマジでパラレルワールド行きたい。

たんだって。ガチらしいぜ」

現代の技術とか一個人の力とかそういうの

余裕ブツこいていた昼の俺ら

「嘔吐け」

で無理なのは分かってつけど行きたい。一刻

「肝試しやろうぜ！」

「よーし分かった出なかったら五千やろう

も早くこの場から抜け出したい。エスケープ

そう言い出したのは誰だっけな。ああ喜田

じゃねえか」

したい。冗談じゃなく。

だ。パツキン。

「乗った」

青里が金に魂を売った。金に魂を売って金を得た。あれこれ最終的に魂キャッシュアップクしてね？

「おいこら青里」

「あ？何、金で釣んの？オツケ参加する。無条件で千円な。欲しいゲームあんのよ」

羽賀、お前もか。

「どれだけ金好きなんだよ羽賀お前」

「これで残りは田辺だけか」

そう三人が俺を見る。うっわ面倒な展開。

しかし、だがしかし。

「蒸し暑いからパス」

俺はノーと言える人間です。

ほら、肝試しとか今時ダセえし。怖いわけ

じゃねーし。怖いとかいい年してなんなのっ

て話だし。怖いわけじゃねーし。

「いいよ。三人で行こうぜ」

「待てやこういうの普通は全員一致じゃなきゃ行かないとかそんなパターンやろが」

「まあ田辺はチキンだしな」

「あ？」

「別に怖いなら怖いとハッキリ言ってくれて構わないぜ？こないだ映画観に行った時もホラーの時身構えてたし」

「上等じゃボケ行つたらやんけ」

誰が怖がってるっつーんだふざけんなぶ

ちのめすぞボケ。

まあいいか。幽霊なんざいるわけねーし。

幽霊の正体見たり枯れ尾花つてな。あんなも

ん臆病者の妄想だよ。

いざ廃墟へ

「中は思ったよりも綺麗だな」

「誰か溜まり場にしてんじゃね？」

「ありえるわね。ポテチの空き袋見つけたし」

「お前らホント飽きねえな。今時肝試しとかガキかよ。もう帰ろうぜ」

「とビビリ君が申しております」

「誰がビビリじゃ。それで申すやのうて仰るやろが」

「うーわ身内じゃねえ発言きたよビビって

口悪くなってるわ」

「なんで身内じゃねえ発言？」

「申すって謙譲語じゃん？」

「ああなるほど」

それで現在廃墟なう。昼に来りやいいのに呪われても知らねえぞお前ら。

それで懐中電灯が頼りないのは俺の錯覚だろうか。

ただいま午前の1時です。やばいね。こいつらホラーだと主人公なんの関わりもなくただ演出のためだけに死ぬ役割だよね。

俺？ちげーよ今も否定的なんだから死ぬ訳無いじゃん。

兎に角さっさと帰らねえとお前ら命落と、

「あ、なんか女の人もいる」

はい死んだー！こいつら死んだー！俺生き残るー！

……俺が生き残る根拠ってなんだろう。何処にあるんだろう。急に自信がなくなってきた。逃げたい。

「大丈夫すか？俺ら肝試しに来たんすけど、そちらさんも？」

さっさと逃げよう。何話しかけてんだ喜田のバカ野郎。

「あ、おい田辺どこに行く」

「忘れもんしたから車戻るわ」

「完全にビビってるしそれだとお前死ぬんじゃない？」

オツケ分かった身構えるわ。少しでもその

女アクション起こしたらターンしてダツシ

ユするわ。

そんで女は、

「……ないの」

と言った。言いやがった。

「ないの？何が？一緒に探しましょうか？」

構ってないで逃げんぞおい。こんなもんガ

チでやばいやツじゃんもう帰ろう俺の部屋

でドラマ観ようぜ。

「はい……お願いします……私の眼」

振り向いたその女の顔には——もういい

や。結論。お齒黒べったりでした。幽霊かと

思いきやまさかの妖怪だよ。斜め三十度に度

肝抜かれたよ。

余裕が砕け散った俺ら

「ふあああああああああああああ」

ダツシユダーツシユダツシユー。

尋常じゃない速さで追ってくるお齒黒べ

ったりから逃げるため、外に停めてある車に

乗り込む。頼むから神様俺だけは救ってくだ

さい。死が救済とかそういうのはナシの方向

で。

「もういる！？全員いる！？」

「あれ喜田いねえ！」

「んなもん知るか！あいつが言い出したん

だからあいつの責任！」

「田辺ホント外道だな！友情の欠片もね

え！」

そう言いながら車のエンジンかけ始める
お前もどうだよ青里。

「星見えてんのにずぶ濡れとかアウトじゃ
ねえか！」

余裕を取り戻した俺ら

「よし！これで——」

「とりあえず避けて！」

「そんなこんなで無事に帰って来れた俺たち
仲良し三人組だが」

「イイイイ」

「了解！」

「おい待て色々すっ飛ばすなやそんで四人
組だろ三人組ってなんだ」

「うっわ来たわよどうすんのよこれ！」

別に車道にいるわけではないが、一応念の
ためか青里は反対車線にはみ出るくらい女

街の灯りが見える場所まで辿り着き（妖怪
と幽霊も消えていた）、その足でなんとなく

「とにかく振り切るしかねえだろ！」

から距離を取った。そしたら。

「俺の部屋で一泊。何もなかったとは思えない
ので念には念を入れ、今日にも神社でお祓い
しようかと談義中。」

「てかさつきから田辺がやけに」

「わーなんか合流したー！」

「早々に恐怖で落ちたお前に語る義務など
ないわ軟弱者め」

「うきに近寄らずなんだって」

「後ろでなんかお歯黒とずぶ濡れが談笑し
始めたぞ猛ダツシュしながら！」

「いや落ちてねえよ。あれはあれだ、あいつ
らのどつちかの催眠術だ」

「田辺えええええ！」

妖怪も幽霊も人間じゃねえなとつくづく
思う。

「いやー危なかったわね。皆被害はなかった
みたいだし」

車内はパニック。喜田もうこれ完全に脱落

だ。気絶で終わってくれてることを願うし

「いやー危なかったわね。皆被害はなかった
みたいだし」

かない。幽霊も妖怪も現代のやつって大抵失

神したら満足して消えるしな。

「……気失ってるわ」

「まだ来てるまだ来てる！」

「おい、田辺なんかいい案——」

「……気失ってるわ」

「って前前！人いる！」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「……気失ってるわ」

「無視してんじゃねえよ。つか喜田はどうした喜田はあいつ無事なのか」

「今朝メール来た。あのお菌黒があたしらを追いかけてったから助かって、徒歩で帰って来たってさ」

「それ喜田のふりした別の何かじゃね？」

「あたしとあいつしか通じない質問してちやんと答え返って来たからモノホン。保証する」

「生きてんなら喜田除外すんなや。俺たち仲良し四人組だろうが」

「ハブられたのはお前の方だけ、ビビリ君？」

「あ？」

「あ？」

「はいはい喧嘩しないの」

「そーいや喜田は？」

「なんか彼女できたって。そんで今彼女さんとこつち向かってるらしい」

「……俺もう帰るわ」

「何言ってるのここあんたの家でしょ」

「合鍵あるから。部屋の備品壊さなきゃ怒らないから。じゃ」

「あ、チャイムだ」

「……………！」

喜田の彼女は普通の美人さんだったつす。

「今夜あの廃墟にリベンジしようぜ！」

「ふざけんや！」

俺たち仲良し四人組。俺たち今日も元気です。

「喰罪のコントラクト」

守畑岳仁

心地よい微睡みの中、昔の夢を見ていた。

脳裏に焼き付いて離れない、三年前、彼女

に初めて出会った時の光景。首に果物ナイフ

を生やした母、体中から血を噴き出し倒れた

父、徐々に塵となつて崩れゆく妹。今でも時

折、思い出しは心の奥底に鈍い痛みと共に

どろどろと濁った感情を呼び起こす。それま

での日常が崩れ去り、自分の中の大事な何か

が欠けてしまったあの日。

虚ろな人形同然になつた僕の前に彼女は

現れた。

「私と契約しろ、人間。お前の飢えを満たし

てやる。その代わりに……」

「おい、起きろ柘しちゅう」

「ん……？」

呼びかけられて一気に意識が覚醒した。ど

うやら車の助手席で揺られているうちに眠

つてしまつていたらしい。

「随分とまあ、気持ち良さそうに寝おつて、

少々羨ましいぞ」

後部座席に座っているティーが棘のある

声音でぼやく。肩より少し長い銀髪と血のよ

うに紅い目を持つ十代前半程に見える少女

だ。もつとも少女らしいのは外見だけだが。

僕が起きたのを確認すると、運転席に座つ

ている正聡まさとが口を開いた。

「仕事続きで疲れてるだろうが、これで最後

だ。もうちよいがんばれ」

「分かつてるよ。で、現場は？」

僕の言葉に正聡が正面に見える家を指差した。周囲の住宅等に比べると倍以上の広さ

と大きさを持つっており、外から見えるガレージにはいかにも高級といった感じの派手な車が二台停められている。

「現場はあそこだ。住んでいるのは富久山ふくやま

拓蔵たくざう、三十四歳の男性で独身。富久山宝石店

のオーナー。普通のサラリーマンだったそう

だが、三か月前に突然退職。店を構え、高価

な宝石を売り買いし出した。宝石の質はかな

りのもので、今やその手の奴等に大人気だそ

うだ」

「それだけ聞くと、ちよつと珍しいだけで、

ありえなくない話だね」

「珍しくもあるまい。自分の店を持ちたいと

願う人間などごまんとおる。その中で宝石店

を開きたいと思う奴など一人二人ではなからうよ」

ティーが僕の言葉を否定する。確かに、言われてみれば宝石店だろうが何だろうが、自分の店を持ちたいと思うのは珍しくない話だ。

「それもそうだね。あるいは宝石店を開くのが夢だったとかいうのも有り得るね。で、境会きょうかいはどうやって気付いたの？」

「いつものごとく怪しい噂からさ。富久山宝石店では宝石が生み出されている、なんてな」

「なんだそれ？」

「どこをどうしたらそんな噂が立つのだ？」
思わずティーと揃って首を傾げる。

「この噂は宝石の流通に関係してる業者から流れてきたんだがな。詳しく調べてみると不思議なことに、店内で売却された宝石以外は搬入された形跡がない。なのに何故か棚に

並ぶ宝石は毎日補充されてる。それもかなりの数だ。売却された宝石ではとてもじゃないが足りない」

「物質創造か」

「宝石関係だと首都付近じゃ六件目だな。似たケースが前にあったから境会もこんなに早く気付いたんだな。たぶん、店の奥でせつせと作ってたんだろうよ」

正聡がファイルに束ねられた資料の束を渡してくる。一番上の資料には富久山の顔写真や様々な経歴が羅列されている。とりあえず顔だけは覚え、それ以外の情報は適当に流し読みするだけに留める。

「まあ、いつも通りだね」

「そうだな。監視の話じゃ家にいるそうだが、どうだ？」

言われてティーは少し眼を細め、富久山の家を覗む。

「気配もする。間違いなくいるぞ」

とても嬉しそうに彼女が呟く。その表情は楽しみを目の前にした子供のそれで、口元に浮かぶ笑みは純粹さを通り越して狂気さえ感じる。

「待ちきれんな。行くぞ、終」

「うん。さっさと片付けよう」

そう言って二人揃って車を後にした。

そのままティーと並んで富久山の家に入り込む。わざわざ行儀よくベルを鳴らしてやる義理は無い。

「む……?」

ティーが玄関を開けようとするが鍵がかかっており、ガチャガチャとドアノブが音を立てる。

「破るぞ」

軽い口調で告げると、ティーは扉を蹴りつけた。大して力を込めたように見えないが、玄関の扉は轟音と共にかかっていた鍵とドアチェーンを引き千切られながら開いた。おそらく修理しないと扉として機能しないだろう。むしろ原形を保ったことが不思議である。

「だっ、誰だ?!」

音を聞きつけたのだろう男が一人家の奥からやってくる。写真で見た通りの顔だ。首に下げているアクセサリーや指輪はどれも色鮮やかに煌めく宝石があしらわれており、素人目にも高価な品だと分かる。

「間違いない。富久山拓蔵だね」

「そ、そうだが、君たちはいったい……」

富久山は扉と僕らを忙しなく見比べている。扉の異常な壊れ方から僕らの仕業だとは思えないのだろう。

「何、大した用ではない。貴様に取り憑いているモノに用があるだけだ」

ティーがそう告げた瞬間、富久山はあからさまに顔色を変えた。

「な、何を言っているんだね、君たちは。大人をからかうんじゃない……」

「誤魔化しは結構。僕らはよく知ってるんだ、ソレがどんなのかをね。ソレは危険過ぎる。できれば大人しくこちらに差し出してくれませんか？」

富久山の言葉を遮って告げる。正直な所、こんな勧告を素直に聞いたら僕らが出張る

事態にはならないと分かっているけど、規則として一応言っておかなくてはならない。

「チィ、思ったより早かったな」

富久山の口から先ほどとはまるで別人の声が零れると、彼の身体から何かが飛び出てきた。

ソレは一見、人間に見えるモノだった。金髪碧眼で、病的なほどに白い肌。そこだけを見れば人として通じるだろう。だが、その背に生えた蝙蝠を思わせる黒い一對の翼があることを否定する。僕らはこの異形をこっぴどく呼ぶ。

——悪魔、と。

悪魔。そう呼ばれる存在が空想という領域にいたのはもう過去の話だ。

七年前、唐突に世界各地で、悪魔たちは現れ始めた。悪魔は決まって強い願望のある者の前に現れては契約を持ち出す。契約を結べば、悪魔はその条理から外れた力で契約者の願いを叶えてくれた。ただし、代償としてその願いに見合うだけの罪業を積むことを求められるのだ。

悪魔は契約者の罪業がより深いものになるほど、その欲に塗れた感情を糧に成長し、強力な悪魔へと変化していく。そして強まった力で契約者に更に罪業を積み重ねていくのだ。この繰り返しでこの七年間、欲に溺れて人として取り返しのできない段階へと至ってしまった契約者の数は計り知れない。

耳触りのよい甘言を弄し、人を墮落させるその姿は正に悪魔と呼ぶに相応しいといえるだろう。

「〃怠惰〃と〃貪欲〃、おまけに〃虚飾〃か。なかなか良さそうじゃないか」

呟いて、ティーは僅かに舌舐めずりをする。

幼く見えるその外見に対し、その動作は可愛らしく見えるものであったが、何故か見ている者に得も知れぬ恐怖を覚えさせた。

「イ、イエンオム。こいつは……何だ？」

今にも腰が抜け、膝が折れそうになりながら富久山は悪魔に問いかける。

「お、お前は……!!」

イエンオムと呼ばれた悪魔は何かに気付いたように後ずさる。そして徐々にその顔に

怒りのようなものが浮かんできた。

「お前、〃根源〃だな?! 同胞でありながら何故、俺達を襲ってくる!」

「気付くのが遅いな。気配くらい読め」

「そんなことはどうでもいいっ! 貴様、高位の悪魔でありながら何故、人に仕えている! 契約無しでも存在を維持できるはずだろう?!」

なおも怒鳴り散らすその様子をティーはせせら笑う。

「何故? そんなことも察せんのか。属性

も見抜けぬなど情けない奴だ」

そこで一度言葉を切ると、ティーの背中にイエンオムと同じく一対の翼が現れた。イエンオムより巨大なそれはティーの小柄な体

とは本来釣り合いはずだが、不思議とティーには良く似合っている。というよりは翼があるのが自然と言える感じだ。

「私はティエメロット・バエル・ノートウルグ。『根源』の一人にして、『暴食』を司る悪魔。私は私の欲求を満たす、ただそれだけのために動くだけの事よ。悪魔なら理解できるであろう？」

「欲求だと？ ……まさか貴様は」

何かに気付いたイエンオムが更に一步後ろに下がる。その顔色ははつきり分かるほど青ざめている。

「そう、私は悪魔を喰らいたいのだ」

あの日、彼女は僕に契約を持ちかけた。

「私と契約しろ、人間。お前の飢えを満たしてやる。その代わりに……………私に悪魔を喰わせろ」

三年前の八月十七日。あの日、僕は母親と

共に病気だった妹の優季ゆきの見舞いのため病

院に来ていた。妹の病気は決して治療不可能

な物ではなかった。だが、生まれつき体の弱

かった妹は手術に耐えられる状態でなく、医師

に告げられたのは手術の成功率は限りなく

低く、尚且つこのままでは余命いんげん幾許もないで

あろう、という残酷極まるものだった。手術

をすれば助かるかもしれない。しかし、失敗

すれば命を失うことになる。そうでなくても

このままではやがて死を迎える。

おそらくは手術をするという選択肢がベ

ターだったのだろう。だが、手術が失敗すれ

ば僅かでも共に過ごせるであろう時間を失

うことになる。

両親や僕は勿論、妹本人もすぐには結論を

出せなかった。

「その娘を助けたいか？」

それは手術が出来るかどうかの瀬戸際の頃だった。僕と両親、そして妹しかないはずの病室に『ソレ』はいた。肌は病的なまでに白く、背中には蝙蝠を想わせる一對の黒き翼が生えている。その姿は物語等に出てくる悪魔にそっくりだ。その珍妙な姿をしたモノは天井に立って話しかけてきた。

「望むならば、私と契約しろ」

あまりの異常事態に誰も口を開けなかつ

た。少しして、ようやく父がソレに尋ねた。

「助けられるのか？」

精神的に追いつめられていたからか、その時の僕らは正常な判断が出来ていなかった。

優季が助かる、というその言葉に魅入られ、

ソレと契約するという行為がどうということ

か全く考えなかった。あの状況において、あの言葉は正しく悪魔の囁きというやつだった。

「勿論。私の力ならば可能だ」

その言葉を信じ、父は悪魔と契約してしまった。契約を結ぶと、優季の容体が瞬く間に回復した。まるでおとぎ話の魔法のように。

あの時、僕らは心の底から喜び、目の前の悪魔に感謝してしまった。

「では、契約を履行してもらおう」

悪魔が父の体に体当たりするように入り込む。次の瞬間、父は机に置かれていた果物ナイフを掴んだ。見舞いの際、果物と共に持ち込んだものだ。父はそのまま流れるようにして、僅かばかり果汁で汚れたナイフを母の首に突き刺した。母の顔が驚愕に染まり、や

やあって倒れる。首筋から溢れる血液の赤色が鮮やかで毒々しい。

「……………え？」

思わず声が零れる。何が起きているんだ？

「命を助けるには命が必要。さて……」

父の口から先程の悪魔の声が聞こえる。もはや僕も優季も呆然とするだけだった。

「その娘を生かすためだ。糧となれ少年」

そう言って父の皮を被った悪魔は果物ナイフを僕に振り下ろす。

「あづ……………」

咄嗟に避けようとするも間に合わず、ナイフは僕の左肩を切り裂いた。追撃しようとする悪魔がナイフを構え、突きだす寸前、

「やめてっ」

背後の優季の声に悪魔は動きを止めた。

「やめる？ 契約不履行となるがいいのか？」

「いいからお願い。これ以上誰も殺さないでっ！」

それは優季の心からの言葉だったのだから。悪魔はしばし優季を見つめた後、口を開いた。

「よくは分からんがいいだろう」

その言葉に僕と優季は心の底から安堵した。だが、それも束の間のことだった。

悪魔が父の体から抜け出すと同時に、父は全身から血を噴き出しながら死んだ。

「なっ?!」

言葉を失い、呆然とする僕らに悪魔は語りかける。

「契約不履行の代償だ。当然だろう。この世の摂理を半端に歪めたのだ。報いは重い。そして……娘」

悪魔が優季を指さす。

「貴様の命は仮初。間もなく塵となって消える」

「……え」

優季が呟くと同時に、その手足が塵となり音を立てて崩れ始めた。彼女の体中から塵が吹き出る。

「優季っ！」

急いで駆け寄るが優季の体に触れることすら叶わない。正確に言うなら触れた先から崩れて、ただの塵と化していくのだ。

「お、兄ちゃ……」

助けを求める声を上げようとした途端、優

季の下顎が崩れて落ちた。もはや言葉一つ満足に話せない。そして……。

瞬く間に優季はただの塵の山と化した。

「クハッ。クハハ。クハハハハハ!!」

狂ったような悪魔の笑い声だけが病室に響く。悪魔はととても愉快そうに満面の

笑みと共に大口を開けて笑い続ける。

「素晴らしいっ！一縷の望みに全てを賭け、募らせた願いが崩れ去った絶望！喪失

感！そこらのありふれた思考よりよほど

上質だ」

身を震わせながら悪魔が僕や皆の死体に視線を巡らせ、

「契約不履行故、一度きりなのが残念でならんが、その価値はあった。感謝するぞ。この上なく美味であった」

そう感謝の言葉を告げた。

「羨ましい。私も味わいたいものだ」

聞き慣れない、可愛らしい少女の声が聞こえると共に、悪魔の頭部と身体が二つに分かれた。

「あ」

間拔けな声を残し、悪魔の首は宙を舞った。

「まあ、仕方ないことだ。『食欲』と『傲

慢』の性質では説明などという親切且つ相

手の利益となることなどしない。この顛末は必然であったのだろう」

少女が滔々と説明するが、僕はなにも応えなかった。もう全てがどうでもよかった。病室の壁にもたれかかるように座り込む。身体

が重い、内側は浮いてしまいそうなほどに空虚なのに。ああ、酷く渴く。訳が分からないが、さつきからずっと、無性に何かに焦がれる感覚に襲われている。

「普通の悪魔は人の感情、それも質や量が一定以上のモノを摂取し続けなければ消滅する。そう考えると、彼奴も存在するのに必死だったのだろう……どうでもよいが」

しばらく続けていたが、何も反応しないのが気に障ったのか、少女は顔を顰めた。

「やれやれ。少々、心を喰われたとはいえ、これでは操り糸の切れた人形よな。折角、命を拾ったというに勿体の無い」

ぼやきながら少女は僕の目の前にしゃがんで、顔を覗きこんできた。眼が合う。紅い。

まるで血の色のようにだ。

「虚ろ。さながら穴の開いた水風船か。……だが、少しばかり残っているな。復讐心？ 哀傷？ 否、これは……飢え、か」

何かに気付いた少女は、その小さな口の両端を釣り上げ笑みを浮かべた。その笑みはどこまでも純粹で、どこか狂気を感じる。

「これは傑作。確かに相応しい。契約するに値する。心の飢餓とでもいうべきものか。結構結構。私が喚ばれたのも得心がいく」

呵々大笑し、少女は僕を正面に見据えながら告げた。

「私と契約しろ、人間。お前の飢えを満たしてやる。その代わりに……私に悪魔を喰わせる」

その言葉にようやく僕は反応した。

「契約……」

「そうだ。私は少々特殊だな。本来、人と契約する必要はない。だが、それでも契約者のいる方が力を出しやすいし、何かと都合が良い。無論、そちらにも得はある。私の食べた感情はお前にも流れる。他人のモノであれ、お前の内側を満たしてくれよう」

「………いいよ」

少しだけ考えて、僕はその契約を受け入れた。彼女の言う通り、僕の内側は空っぽで飢えて仕方がなかった。

お互い空腹を抱えた者同士、僕は彼女と共に悪魔を狩り、罪を喰らう者となった。

「そ、そんな……」

ティーの言葉にイェンオムは慄く。その姿は捕食者を前にした獲物のそれだ。

「別に不思議なことはあるまい。そもそも悪魔とは、『共通意識』という人の思考のプールより溢れ出でた欲望が自我と身体を得て顕現した存在。我欲が強くて当然だろう。それが私の場合は食欲で、たまたま捕食対象となるのが悪魔だけの偏食家だった……ただそれだけだ」

心理学において集団的無意識という考えがある。人が個々に持つ意識の奥底、共通意識というべきもので人は繋がっているというものだ。かつてティーが教えてくれたが、その共通意識とは器のようなものらしい。器ということとは当然、許容量がある。そして個々の意識から流れ来る思念が七年前、その容量をとうとう超えてしまった。おそらくは人口増加と深く入り過ぎた欲望の所為だ。そして溢れた思念は意識という精神的世界の

外、現実世界へ悪魔という形で現れた。これが悪魔が生まれた経緯であるらしい。

「『食欲』、『暴食』、『色欲』、『憂鬱』、『憤怒』、『怠惰』、『虚飾』、『傲慢』、『嫉妬』。人は罪を犯す理由には事欠かん。

悪魔に惑わされるのも必然。故に、私のような変わり者が必要とされる。境会は悪魔を始末したい。私は悪魔の在処たぐものが知りたい。実に見事に利益が合致したものだ。こういうのを、なんだ……『win-win』とか言うらしいな」

境会は対悪魔のために世界規模で結成された組織だ。悪魔狩りをしていた僕を勧誘したのも、彼らが効果的な対策手段を発見できなかったからだ。悪魔には悪魔を、形振り構わぬその姿勢は悪魔の脅威と被害がどれ程のものかを如実に語っている。

「まあ、私は食事に困らんなら何でも構わんがな」

ティーが再び舌なめずりをする。その姿は捕食者が被捕食者に相対した時のそれだ。

「さて、下らんお話はここまでだ。とつとと目的を果たそう………柎」

「そうだね。……富久山拓蔵、境会の使徒として、私、槻橋柎つきはしとその使い魔、ティエメロット・バエル・ノートウルグが貴方の罪及び憑きし悪魔を裁きます」

型通りの宣告を言い終えると、ティーの身体が黒色の霧に変化する。霧は僕を包み、再び姿を変えていく。霧が晴れる頃には、黒いコートが僕に纏われ、右手には巨大な黒と銀の二色で塗り分けられた鎌が形成されていた。鎌の刃の部分は上を黒色、下を銀色でジグザグ模様がまるで口のように描かれてい

る。これがティーの食事時の姿だ。鎌の刃が口のように開閉し、言葉を発する。

「いただきます」

「ウアアアアアアアッ!!」

顔を恐怖に歪め、叫び声を上げながらイエンオムが霧に姿を变じる。鈍色の霧となったイエンオムは富久山に纏いつくとティーのように鈍色のコートと剣に変貌した。

「畜生畜生畜生……!!」

がむしやらに剣を振り、富久山——否、その体を支配するイエンオムが斬りかかってくる。だが、それは無駄な足掻きでしかない。

これは食事であって、戦いではないのだから。

「シッ……」

短く息を吐いて、口を開けた得物を横一文字に振るう。

「ゲキヤッ」

イエンオムが奇妙な悲鳴を上げる。鎌は富久山を傷付けることなく、内側のイエンオムのみ引きずりだしており、開いた口がちりちりとその身を啜くえていた。徐々に口が閉められていく。

「やめろっ！ やめてくれっ！ 頼む、お願いだ!! 消えたくないっ!!」

喚き散らすイエンオム。こういう悪魔の末路は過去に何度も見たが、特に何も感じない。悪魔はただ喰らう、それだけの相手だ。

「そう言われて食事を止める馬鹿はいないだろう。餓死は御免だ」

「そん、な………あ」

断末魔を上げる暇も無く、イエンオムはその姿を崩し、霧となってティーに吸収された。それと呼応するように、富久山も意識を失い

倒れた。おそらくは悪魔との契約が強制解除された際の反動だろう。よく見ると、彼が身につけていた宝石類は塵に変わっていた。

「土は土に、灰は灰に、塵は塵に、だ。所詮は、悪魔の生み出した嘘偽り。夢幻の結晶よ。対価は財産の喪失といったところか。……こ

ういうのを、なんだ。『労働なき富』とかいうのだったかな。次から真面目に働くことだ」

少女の姿に戻り、彼女は意識の無い富久山にそう告げた。そのまま、踵を返し去ろうとして、一度だけ振り返る。

「言い忘れていた。悪くなかったぞ、お前の悪魔。……ごちそうさま」

そう言ってティーは満足そうに微笑んだ。

(了)

イラスト
作品
1212





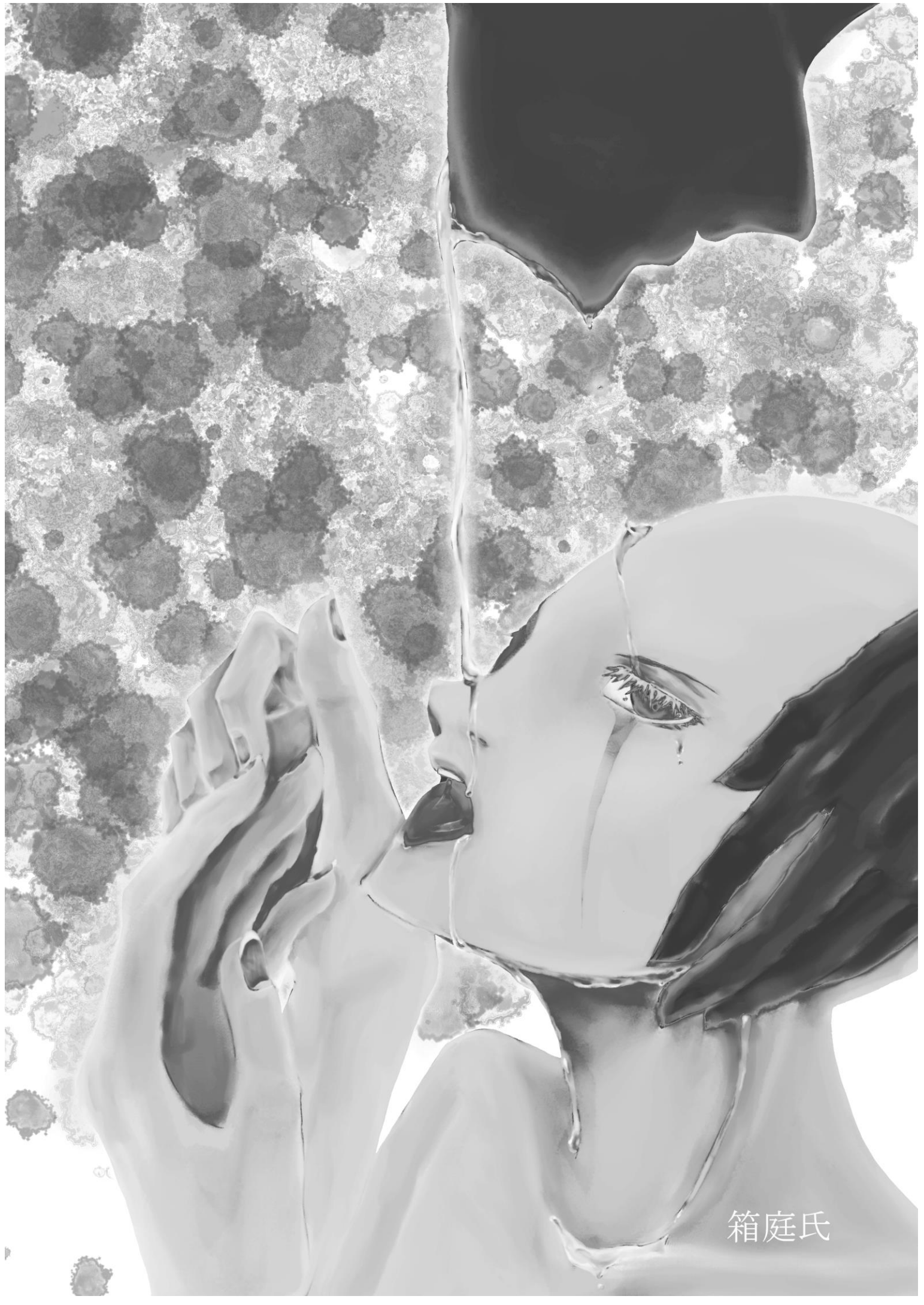
こんにちは、
1年のKAIWAIです。

私は「自分の好きなイラストを
かけるようになりたい」という
気持ちからイラスト班に入ったので
自分の納得できるイラストを
かけるようにがんばって
いきたいと思います。

KAIWAI

こんにちは、はじめまして。
現視研イラスト班の
2年で絵とかをかせせて
もらってます、A日(あい)です。
すずしくなってきたので
秋っぽい絵を描きたい
と思い、マフラーしてる
女の子にしてみました。
他意はないです。ハイ。
ありがとうございました☆
A日





箱庭氏

はじめまして。

イラスト班(ではない)wolfと申します。

会誌の編集をしていて

なんか絵が少ないなー

↓

よし自分で描こう!

ということで東方の天子ちゃん
を描いてみました。

色とか陰影とかいろいろやった
けど白黒やった・・・



Wolf

こんにちは、イラスト班代表をさせていただいているクロムと申します。

去年、一昨年とハロウィン系のイラストを描いていたので、今回は秋の果物を描きました。

ああちなみに、果物と一緒に獣耳娘が居るのは、私が唐突に描きたくなっただけですので、特に深い意味はありません。

昨年度の個人的活動報告

今年1月に開催された【コミックとレジャー23】にて、とあるライトノベル作品の二次創作を出展しました。

初イベントでのサークル参加で不安でしたが、楽しかったです！（原稿の締め切りに間に合わなかったのは内緒で…）



ILLUSUTRATION ● クロム

カリスム



音楽班コンピ2014楽曲制作コメント

音楽班

音楽班コンピ2014について

どうも、音楽班コンピ2014企画リーダーの林檎と申します。音楽班コンピ2014というのは現視研音楽班でオリジナル曲を制作し、それらを収録したコンピCDを高専祭で配布する企画です。高専祭当日にはこの会誌とともに配布されているでしょうから、どうぞご自由にお持ち帰りください。

このページではCDに収録されている楽曲をつくった音楽班メンバーの楽曲制作においてのコメントを集めました。CDを聴きながら読んでいただければ幸いです。

楽曲制作コメント集

● 1 go with me / Kirii

● 2 電子を流る風 / wolf

どーも、wolfです。今回の作品はどうしてもシンセサイザを多用してみたたくて作ってみたピコピコ感満載の音楽です。ゲーム用

の曲だったので最初は戦闘をイメージしていたのですが何故かこんな感じに・・・とは言え今まで自分の作った中で一番の出来です！

● 3 1年生ゲームで作った曲です

／かおす

はじめまして、一年生のかおすです。この曲は、一年生ゲームのタイトルに使うために作った曲です。ファンシーな感じでと頼まれたのですが、ファンシーという単語がいまいちよくわからなかったので透明感のある曲にしてみました。硝子っぽい、清流っぽい雰囲気がお気に入りです。詰め込みすぎでごちゃごちゃしてしまい、まとまりの無い曲となつてしまったのは今後の課題ですね。

● 4 Impatience with Calm of Sorrow

／庭師

今年も作曲時の気持ち曲名になってますタイトル的には去年の曲とつながってます。平穏と焦りが混ざった感じをイメージしたつもりです。

● 5 My block / ちげ

ブロックを、頭の中で構成された形に積み上げる楽しさ、完成したときの喜び、簡単に壊れてしまうもろさを表現しました。小さい頃よくブロックで遊んでいたのも、その経験からです。

● 6 32 / えじそん

ひとりひとりは完璧じゃなくても、支えあって十分なものになればいいなあという気持ちを込めました。これがなぞなぞだったらパンはパンでも食べられないパンはなんだ、くらいの感じです。

● 7 スペースデブリ / 夢地

● 8 star flyer / kyumina

私の処女作となる音楽です。あえて音楽の感情を消し、そこに残った無感情を大きく表現しました。自分の世界観が上手く出せたかどうかは不安ですが、頑張りましたので是非聞いていただけると嬉しいです

● 9 fake hydro / 黒板

現在(締め切り八日前)鋭意制作中です。最初は三時間くらいで終わるやろ、と舐めてかかっていたのですが一週間たった今も完成の見込みが立たず焦っています。締め切り伸びてて良かった・・・

● 12 エチュード / 珠璃

賑やかな曲の中にこれくらいシンプルな曲もいいんじゃないかなって考えたのがきっかけです。今回はもっとトラック数増やしてにぎやかな曲作ります・・・

● 10 未完成響音 / 林檎

去年は「Pop」風の曲を作ったので、今年はロックやテクノといった他のジャンルの曲を作りたかった・・・のですが今年も「Pop」風の曲になりました。こういうジャンルが作りやすいみたいです。

● 11 落夜 / 夢地

一曲目は寝落ちをテーマにしました。一回くらい天地がひっくり返るくらい変な夢を見てみたい。二曲目の方は完成しているかどうか解りませんが、微和風を目指して作りました。間に合わなかった場合は宇宙と人工衛星をイメージして作った半年以上前の曲が入ってます(震え声)。

一年生によるゲーム製作企画

「Runaway」

かおす

はじめまして、今年高専に入学し、現視研にはいったかおすです。暑い夏はあつという間に終わってしまい、もう入学してから半年ほどになりました。すっかり高専生活に慣れてきて、部活にも大分慣れてきました。

さて、時はさかのぼって半年前、僕たちがこの部活に入ったばかりのことです。この部活動にはいろんな分野で実力を持った先輩方がいらつしやり、その作品を見ては圧倒されました。予想外のレベルの高さに怖気づいてしまった、といっても過言ではありません。しかしそれと同時に、俺たちもこんな作りたい、とも思うようになりました。

そんな中、ある一年生が「おれたちだけでゲームを作ってみよう」と提案します。俺も俺も、と参加者はどんどん増えていき、一年生全員が参加する、この大企画が始まりました。

(あらすじ).....

ある日ニート撲滅案を出した和泉総理大臣は、そのせいで総理大臣の座を追われ、さらにニートに追いかけられる羽目になりました。果たして、和泉氏はニートから逃げつつ、阿蘇(あそ)現総理大臣から首相の座を取り戻せるのでしょうか。

.....

ゲームジャンルは脱出アクションゲーム。

プレイヤーはストーリーに沿って、各地を駆け巡っていきます。ニートの暴動や政敵の阿蘇さん(あそさん)の支持者による妨害をかくぐりながら、選挙活動をして少しずつ支持者を増やしていくのが目的。せっかくニートから逃げ切れても、支持者が少ないと落選(ゲームオーバー)してしまいます。

音楽や効果音、画像を含め、完全に自分たちで製作しました。初めて挑戦したため、いろいろとおかしい部分もあるとは思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

あとがき

はじめまして、げんしけん年の古月爪有（ふるつき つめあり）です。この「なけなしのかね」の編集担当をしています（といっても、編集とは名ばかりで仕事はしていません）。このあとがきが初仕事だったりします。こうして、**ET**で名乗るというのは、なかなか気恥ずかしいものがありますね。私自身は気に入っている名前なので恥ずかしがらずに名乗っていただけるようになりたいものです。

「なけなしのかね」には、物語を書く人たちの小説がいくつかと、絵を書く人のイラストがいくつかと、それからコラムとして、創作物を紙という媒体に載せにくい方々が書いた記事が書かれています。一冊で三倍おいしいですね。私は、物語を書く人として短い小説を掲載していません。先頭に書いてある小説ですね。読んでもらえると嬉しいですよ。

それから、「なけなしのかね」に掲載さ

れている作品を見たり読んだり、展示されている音楽を聞いたり、ゲームを試してみたりと、私達げんしけんの作品を楽しんでもらえたらならば、その感想をいただくと、それは私達にとつてはこうえなく、嬉しい事です。簡単なもので構いません。「楽しかったよ」とか、「まだまだだね」とか、そんな言葉がひとつあるだけで、私達は、やる気に火がつかます。

近くにげんしけんの人がないという場合でも、インターネットを通じて、一声かけていただくことができます。たとえば、ツイッターアカウント@nct_mv33で、あるいは奈良高専現視研のホームページから、私達に感想をお伝えいただけます。ちよつと面倒ですから、無理をすることはないのですが、無理をするといふほどでもない程度の手間だともおも

ます。

さて、私がよく読む、大衆文学というやつは、このあたりで謝辞が入ったりするのですが、実は私、誰がどこまで頑張ってくれているのかということ、知らないんですよ。これはよくないことです。次の会誌では先輩方が何をやっているのかということに注目しておかないと。

そういうわけですので、編集としての会誌をまとめあげ作り上げてくださったwolfさんに、多大な感謝とごめんなさいをしておきます。ごめんなさい、しごととしていません。

げんしけんとは関係のない仕事に追われつつ、この会誌が配布される最初の場所、高専祭がうまくいくことを祈って。

やつと千文字を超えました。狙ってた。

古月 爪有

あとがき2

この会誌を手に取りここまで読んでいただきありがとうございます。

よく読んでくれた人は三回めまして！そうでない人ははじめまして！。編集担当で音楽班でありながらイラストを描かせて頂きましたWOLFです。

あとがきで「なけなしのかね」の解説をしたかったんだけど全部古月くんにかれちゃったので書くことがない！
おわり。

・・・というわけにもいかないので現視研についての話を少し。

この現視研、普段はやることがほとんどありません。自分たちでゲーム企画して勝手に作ったり、適当に絵描いたり、音楽ちまちま打ち込んだりetc...

企画しないとそういうことすらしていないフリーダムな研究会です！

この高専祭と「なけなしのかね」はこの唯一の発表場所なんです（個人で投稿している人はいますが）。一般の人たちに「こういうことやってるよー！」って言えるのはここだけなんです。だからこそ気合入れて編集しました。

イラストがいっぱいあれば華やかになるんだけどなあ・・・

←
そうだ、自分で描こう！

そんな感じで色々やってみたり編集の面倒臭さ面白さを体感しました。

皆さんに少しでも面白い！って思っただけいたら嬉しいです。

最後に、これを読んでいる奈良高専に入ろうかなって思っている中学生の皆さん、奈良高専現視研のことをぜひ覚えておいてくださいね。

WOLF

● 現視研ホームページ



● 現視研ツイッター



● 現視研ブログ



平成26年 第48回高専祭
奈良高専 現視研

● 編集

wolf

古月爪有

● 表紙

箱庭氏

● 扉絵

wolf

● 文章

古月爪有

箱庭氏

小刀

キリギリス

デピテヤ

守畑岳仁

● イラスト

KAIWAI

A日

箱庭氏

wolf

クロム

奈良工業高等専門学校

第48回高専祭

現代視覚文化研究会会誌

なけなしのかね

